

## ホテルはまぎく再出発

～「逆境に立ち向かう」胸に～

震災で被災し営業を休んでいた「浪板観光ホテル」が、「三陸花ホテルはまぎく」と改名し、8月30日、約2年半ぶりに営業を再開しました。ホテルは、社長が犠牲になる一方で、従業員が、秋田県五城目町の宿泊客を機敏に誘導して救い、町と五城目町との友情の絆を結ぶきっかけになりました。ハマギクの花言葉は「逆境に立ち向かう」。関係者の決意を秘めたホテルの再出発です。

震災時、ホテルは地上5階建ての旧館に、地下1階地上4階建ての新館が併設されていました。津波に襲われたホテルは3階まで水没し、社長、料理長が犠牲になりました。ホテルには秋田県五城目町の老人クラブのお年寄り一行42人が宿泊し、大衆演劇一座の芝居を鑑賞していました。全員が従業員に誘導され、近くの高台にある集会所に避難し、震災から3日目に、無事に帰路につくことが出来ました。

ホテルは、前社長の弟の千代川茂さんが社長に就き再開しました。客室が60室、宿泊収容人数は250人です。レストラン、日帰り浴場、会議室などのほか、震災前の町



の光景を写した写真を展示した防災展示室が付属しています。ロビーや客室からは、以前のように、雄大な船越湾の光景を望むことができます。

震災から2年半後の月命日の9月11日、五城目町の老人クラブから47人が訪れ、ホテルの再開を祝福しました。ホテル営業本部長の小国正裕さん(58)は「五城目町の方々とつながりを深めながら、おもてなしの心を大切に、お客様に接していきたい」と話しています。ホテルの連絡先は☎0193-44-2111。

## 町内から3団体が認定

～元気なコミュニティ団体～

震災で壊滅的な打撃を受けた町で、地道な活動を展開している「安渡町内会」「特定非営利活動法人まちづくり・ぐるっとおおつち」「一般社団法人おらが大槌夢広場」の3団体が、県の今年度の「元気なコミュニティ特選団体」に認定されました。9月5日、碓川豊町長を表敬訪問した3団体の関係者は、行政と連携しながら、復興に向けたまちづくりに協力し合うことを確認しました。

安渡町内会は、震災前の3町内会を統合して新たな町内会を結成。震災を検証し、独自の防災計画案を作りました。ぐるっとおおつちは、災害FM放送や思い出の品返還事業を展開、被災住民に寄り添った活動をしています。夢広場は、ボランティアツーリズムの企画、運営にあたるなど復興まちづくりの一翼を担っています。

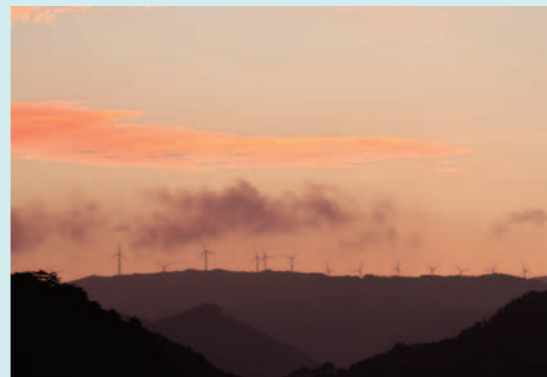
元気なコミュニティ特選団体は、地域の過疎、高齢化などのハンディに負けずに活動している団体を対象に選考され、今年度、県内から14団体が認定されました。町役場



を訪れた3団体の関係者に、碓川豊町長は「行政だけの復興まちづくりには限界がある。みんなで一緒に、住みやすい町をつくろう」と呼びかけました。

安渡町内会の中村百合子さんは「団結して、いいふるさどをつくりあげたい」、ぐるっとおおつちの小松巧さんは「これまで以上にまちづくりに貢献したい」、夢広場の上野拓也さんは「身の引き締まる思い」と、語りました。

## PHOTO まちかど



「小澗川上流で、新山高原の風力発電機の幾何学模様と夕焼けとのコントラストが面白く撮影しました。撮影のタイミングに苦労しました」【7月7日、三浦寧史さん撮影】



「震災から2年半の月命日に、県外のお坊さんの慰霊行脚に出会いました。一行は旧役場前で慰霊法要した後、赤浜方面に向かいました」【9月11日、伊藤陽子さん撮影】

総合政策課では読者の皆さまからのニュース提供をお待ちしています。町民の方々に広く知ってほしい出来事があれば、お知らせください。「PHOTO まちかど」への写真投稿も歓迎です。変容する町の姿、震災前から変わらない町の光景を写真で切り取り、お寄せください。また、広報誌への感想や提言を、お送りください。はがき、手紙の場合は、住所、氏名、連絡先（電話番号など）を明記のうえ、〒028-1192 大槌町上町1-3 大槌町役場総合政策課・広報誌担当へ。

☎ 総合政策課 企画調整班 TEL 0193-42-8724 E-mail : sougouseisaku@town.otsuchi.iwate.jp

## 3年目の仮設 ～より良き暮らしのために～

私の思い出の写真はどこに ～仮設団地で返還展示会～

津波で流失し回収された品々を本人に返還しようという「思い出の品返還展示会」が、町内の仮設団地で開催されています。アルバムを探す団地の住民の方々の真剣な表情に、改めて震災の無残さを思わずにはられません。

震災による津波は、すべてを流し去りました。思い出がいっぱい詰まったアルバム、賞状、日記……。記憶とともに生きている人々から、記憶につながる品々を奪っていきました。これらの品が回収され、一人でも多くの所有者や家族の手に返したいと、展示会が開かれています。

小澗第15仮設団地談話室では8月23日に展示会がありました。段ボール箱に入ったアルバムや写真が並べられ、仮設団地の住民が食い入るように見入っていました。安渡1丁目に住んでいた勝山栄子さん(74)は「思い出がいっぱい詰まったアルバムなどがすべて流されました。何とか探し当てたい」と話していました。

データベース化された品々は2万7千点。展示会は、町の委託で、「NPO人まちづくり・ぐるっとおおつち」が実施しています。メンバーの田中喜基さん(27)は「所有者の名前がわかっていても、どこに住んでいるかわからない人も少なくありません」と話しています。



## 町長随想

⑥ オリンピック開催と 眞の被災者支援

国際オリンピック委員会は、2020年夏季オリンピック・パラリンピックの開催を東京に決めた。発表の瞬間、テレビにくぎ付けとなった。静まりかえった会場でIOCのロゲ会長が「TOKYO」と読み上げた瞬間、大きな歓声と拍手がわき上がり、関係者が抱き合っ喜びをわかちあっていた。国民的には決定を喜ぶべきであると思うが、私は、素直に喜べなかった。

震災から2年半、被災地では、一斉に工事の段階を迎え入札辞退や資材不足などが続いている。そこに来年の春の消費税の増税予定と合わせて、にわかなオリンピックのインフラ整備などで、復興の加速に影を落とされている。復興が遅れると、ますます人口流出が続く何のための復興か分からなくなる。

確かに、オリンピック開催による東日本大震災の被災地支援計画では、三陸海岸沿岸での聖火リレー、大会期間中の東北紹介イベント開催、競技施設の建設や改修に被災地の企業を中心に発注、大会開催前の東北地方の合宿地などを掲げている。今、被災地は復興が途についたばかりである。ここ3年ぐらいが復興工事の正念場であり、7年後の開催直前後の被災地支援は、眞の被災地支援になり得ないのではないかと。

精一杯の支援であろうことは理解できる。しかし被災地は、未だ草ぼうぼうの状態である。被災地の現状を忘れてはいないだろうか。

嘆いていても始まらない。いつの場合でも試練は付きまとうものだ。愚痴は言うまい。こんな時だからこそ、被災者目線に立ち、一日も早く復興を遂げ、心から「おもてなし」の気持ちで世界の人々を迎えたいものだ。

(碓川豊)